

日本記者クラブ会報

第211号
1987年
9月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル 100
◎ 社団法人 日本記者クラブ
電話 五〇三一二七二(代)

「土地」シリーズ発足へ

政局の秋に対応も

猛暑もようやく峠を越し、再び本業に精を出す季節となった。このころ合意を見計らって、企画委員会はかねて準備の新シリーズ研究会「土



「超伝導フィーバー」に火をつけた田中教授を迎えて研究会(8.11)

地を考える」を発足させる。

広瀬一郎、鈴木幸夫、平田真巳の三委員が中心に案を練ってきたもので、第一回は九月十六日、国土庁の清水達雄官房長を迎え、土地問題の現状と問題点を聞く。

これを皮切りに月二回でいど、都庁、大学、研究所、関連業界などから順次、講師を招いて問題を掘り下げていく予定。ご期待を乞う。

九月十月はまた、政界鳴動の季節である。自民党の総裁候補の方々に再度ご来訪のうえ、堂々の政見開陳をされるよう重ねてお願いした。さらに社会党の土井委員長にも、訪米のあと早い機会に来ていただくよう申し込んである。

「日米関係」シリーズも、経済摩擦がますます深刻化し複雑化する形勢なので、忙しくなりそう。差し当たり米国人弁護士、KDD社長、電子機械工業会会長などに口をかけてある。テーマや人選について、会員各位のご希望、ご意見をうかがいたい。

人気集めた「超伝導」

さて、八月のクラブ行事の報告だが、各委員会とも恒例により休み、入会申し込みなどの重要案件は文書回覧や電話連絡によって処理した。

役員、委員の諸氏には果たして十分にお休みいただけたかどうか。

会合もぐっと調子を落とし、記者会見はなく、研究会も「日米」九回目としてカーチス・コロンビア大学教授、単発企画として田中昭二東大教授の「超伝導」と軍事評論家海原治氏の「FSX」だけであった。

ただし、研究会は三つとも、暑いさなかにもかかわらず、なかなかの盛況だったことをご報告しておく。各種の会合のうち、とくに参考になりそうなものについては、内容を会報記録版に収録して会員に配布することが、会報委員会の方針の一つになっている。八月には、リード・シテイクコープ会長と吉富経企庁経済研究所長の話を記録版としてお届けした。記録版は、今後も予算の許す範囲でできるだけ出ししていきたい。

最後に雑件の報告を。まず一九八七年版『会員名簿』(八月一日現在)の作成がほぼ完了した。春から夏にかけての各社の人事異動で、所属や会員区分がかなり変更になっている。印刷に回し、九月中旬には配布できると思う。ご活用いただきたい。

次に、ラウンジとレストランの西側の窓ガラスの様子が変わったのにお気付きだろうか。家主であり会員社でもある日本プレスセンターが、店子サービスマンに西日よけの特殊加工を施したため。おかげで窓際の照り返しもさほど苦にならなくなった。

(事務局長 下田 進一)

話のおきと

コンピューターと新聞

「アネックス」誕生まで



佃 正弘

た。新聞製作部門担当というのは、新聞社の活版、印刷など工場全部の責任者である。

私がこの担当となつてまず考えたことは、将来日経を発展させるには、日経の

工場からブルーカラーを全部なくして、その人件費を編集の取材に回し、取材を強化しなければならぬということであった。このため私は工場の無人化を実現しよう

と思ひ、社の内外に私の考えを示して協力を要請していた。

工場の無人化で最も困難なのが、活字を拾って紙面を組む活版である。活版を何とかしなければ、工場の無人化の実現はおぼつかない。

私がこう考えていた四十年夏ごろ、新聞協会主催のコンピューターに関するセミナーが開かれた。

講師は現日本新聞インキ会長の長谷川勝三郎氏であった。長谷川氏はその直前、日本IBMがその年

始めたコンピューター視察団の第一陣に加わって、米国の実情を見聞して来たばかりであった（私も第四回目に参加）。

私は長谷川氏の話聞いていて、ハッと思ったことがあった。

長谷川氏は直接コンピューターで新聞がつくれると言ったわけではないが、何かをつかもうと思つていた私には、コンピューターで新聞をつくることのできると思つたのである。ヒントをつかんだのであった。

社に帰つた私は、早速技術部会を開いて、コンピューターで新聞がつくれるかどうか、技術者の意見を聞いた。約二十名いた技術者は、全部「ノー」であった。私は「できると思う」と答えた。

IBMとの協同開発へ

それからしばらくして、日本IBMの営業担当副社長（現社長）椎名武雄氏が、所用があつて私のところへ来た。私はコンピューターで新聞をつくることを考えてい

昨年から今年にかけて「メディア

アの興亡」という本が出版された。この本は昭和六十一年度の大宅壮一賞（ノンフィクション）を受賞し、ベストセラーにもなった。特に新聞、報道関係者にはかなり広範に読まれた模様である。

「メディアの興亡」のねらいの一つは、日本経済新聞社が開発に取り組んだ、コンピューターで新聞をつくるアネックス・システムについて、詳細に書くことにあるように思われる。

著者の杉山隆男氏は、私のところにも取材に来た。私がコンピューターで新聞をつくらうと思つた動機や経過などを話したが、記事の都合から私の話は全然載

らなかった。

この本が出てからしばらくすると、これを読んだ私の友人たちから、「メディアの興亡」によれば、昭和四十一年の初秋、君が日経の円城寺専務にコンピューターで新聞をつくる話を持ちかけ、円城寺氏が驚いているところから始

まっているが、突然こういふ話が出てきてもわかりにくい、それまでに至るところを聞かせてくれな

新聞協会のセミナーでヒント

私は四十年三月に日経の取締役編集局長から常務になり、新聞製作部門、技術その他の担当となつ

るが、IBMは協同してやらないか、と持ちかけた。椎名氏は「考えすぎてはしい」と言って帰った。やがて、日経とIBMが協同開発する方針を決め、ここに将来アネックスと呼ばれるシステムの開発が発足したわけである。

私がコンピューターで新聞をつくるかと考えたのは、もう一つの理由があった。

日経にはちょうどその当時から、日本経済新聞のほかに産業新聞を発行しようという構想があった。産業新聞を日刊で発行するとすると、活版がもう一つ必要である。大手町の日経本社でもう一つ活版をつくるということは、そのスペースからいっても人員からいっても不可能である。この面からも、どうしてもコンピューターでの新聞づくりを実現しなければならぬと思った。

コンピューターで新聞がつくれるようになる、新聞に載った記事は全部コンピューターが記憶している。これを再び取り出して加工することにより、いろいろの商

品を生み出すことができる。私の希望はだんだんふくらんでいった。

当時、日経の経営状態は極めて苦しかった。三十九年に東京本社はじめ社屋の建設が終わり、多額の借金を抱えていた。こういう経営状態の下で、アネックスという大プロジェクトに取り組もうというのであるから、無茶といえれば無茶な話である。やるからには、何としても経費を少なくしなければならぬ。一番の問題は、IBMとの費用の分担であった。

IBMはいよいよコンピューターを日経に入れる段になると、その時点から、日経がレンタル料を支払うことがIBMの規定だから、支払うように、ということであった。

確かに、日経とIBM双方から人員を出して研究を進めているが、これはいわばIBMの研究所のようなものだ。このプロジェクトが完成すれば、それを使うのは日経はもちろんだが、他の新聞社も同様追従するであろう。また、

中国の新聞社までも採用する可能性があると思う。したがって、日経はコンピューターのレンタル料を、日経がコンピューターを使って新聞を出すまでは支払うわけにはいかない、というのが私の主張だった。双方の主張は鋭く対立したが、やがて私の主張が通った。

追従してくれた地方紙

これには後日談がある。

今年の一月、日本記者クラブで開かれた昼食会で、私が席につくと、私の前に、旧知のIBM伊藤和郎専務が座っていた。伊藤専務は、私がIBMと交渉した内容などを知っている。伊藤専務の話によれば、いま地方新聞でコンピューターでの新聞づくりが盛んだということ、中国も来年着手するとうことだった。「佃さんの言う通りになって来ました」と話していた。

日経から活字が消えたのが、昭和五十三年三月、私が無人化工場を考え始めてから約十三年が過ぎ

ていた。その後も関係者の努力によってアネックスは進歩し続け、六十一年にはアネックスⅢが完成した。

昨年十二月二日の日経創刊百周年特集号はこう述べている。

「今日のコンピューター社会の姿を、二十年前に的確に予測した人は極めて少ない。その二十年前に日本経済新聞社は、コンピューターによる新聞製作とデータベース構築の研究を始めている。先端技術へのあくなき挑戦は、以来連綿と続けられており、総合情報提供のための基盤を形づくっている」

日経はアネックスを軸として、いま国の内外にわたって拡大歩調をとりつつある。(個人会員)

つくだ まさひろ 大正三年静岡県出身、早稲田大学卒。昭和十一年日本経済新聞入社、経済部長、編集副次長、編集部長、取締役編集部長、常務取締役、専務取締役などを歴任。五十四年相談役を退任。

核抑止論の 土俵は堅かった

大牟田 稔



核保有五か国のプレス代表を迎えて開かれたジャーナリスト国際シンポジウム(8.6) 写真 中国新聞

「平和」という言葉の壁(ひだ)は深い——八月六日、広島で開催された「'87ジャーナリスト国際平和シンポジウム」(広島市など主催)に地元・被爆地の記者として参加しての最大の印象である。

ジャーナリストによる核兵器をめぐる討議は初めてだっただけに、反響も大きかった。「現実的かつ率直な各国の意見の意見を中心に進行したこともあって、論議は核抑止論の堅い土俵の中でのものに終始し、被爆国側の意見とかみ合う場面は皆無に等しかった。多くの外国代表の発言は、自国の核政策の正当性を主張するに急で、現実を超えて描いて欲しいと願った「核のない世界」のイメージは、ついにはずじまいに終わった。

核抑止論の枠内では、いくら討議を尽くしても核廃絶への道筋が見いだせないのは当然である。その意味では、被爆地・広島で催されたシンポジウムとして討議の流れに強い欲求不満を残したことは

否めない。

特に英、仏の記者から相次いだソ連に対する強い不信の声を直接聞いてみると、それが一九七五年のヘルシンキ宣言などにまでさかのぼる深い歴史性に根ざしたものであっただけに、国際的な相互信頼の醸成がいかに難題か、と思わずにはいられない。

討議の前夜、五人の記者に中国新聞社が刊行した英語版の『THE MEANING OF SURVIVAL』(写真による広島被爆史)を贈った。この本には世界主要紙の原爆投下を報じた紙面も写真版で掲載されているが、ル・モンドの記者が原爆投下を「科学的な革命」と報じた自社の紙面を見るなり、「これは我が社最悪の紙面だ」と叫んだのが印象的だった。

しかし、彼は討議の場では核抑止論の立場から核兵器廃絶を「非核化の不安」という言葉で表現した。ということは、ヒロシマが唱え続ける「核兵器廃絶」の訴えだけで世界の世論は動くのか、という新たな命題とぶつかったことを意味する。

確かに、地上から核兵器がなくなれば、互いの国家は裸の通常戦力で対し合わざるを得ない。核戦争の結果生じる放射線の恐怖とは別個に、彼らの歴史は、通常戦争の悲惨を強烈に記憶しているの

核時代を形づくる底流に、そのような不安を内在させつつジャーナリズムの潮流が形成されている、という現実には、国権の発動としての戦争をどうとらえるのか、つまり、戦争発生メカニズムにまで立ち入った論議をしない限り、到底克服できないことを教えてくれた。その点を欠いたシンポジウムゆえに、核兵器の存在について論議すればするほど核抑止論に制約され、ヒロシマが目指す理想は宙に浮く結果となってしまった。

東西両体制間の不信、特に西欧の対ソ不信をどう解くか——そのカギは核兵器問題だけを論じるところからは出てこないのではないかと。少なくとも、地域紛争や人権問題、そして厄介な正義に関する討議を並行させねば信頼醸成は至難だろう。

「唯一の被爆国」の名のもと核廃絶を唱えることと、現実には核兵器の存在する時代を生き抜くこと、という矛盾の谷間にあつて悩む現代は、既成の思想に大転換を求めているのではないかと。この催しを契機に、世論を担う言論人の意見交換が生存のために地球規模で広がれば、と心から思う。

(基本会員)

おおむた みのる 中国新聞論説主幹 一九五三年入社
編集部次長 整理部次長 編集委員 論説副主幹
等を経て八六年から現職

カーチス教授の 新聞批判を聞いて

後藤 文康

日本記者クラブの「日米関係」研究会で八月六日、コロンビア大学のジェラルド・L・カーチス教授の講話を聞いた。知日派学者の日本批判に学ぶ点が多かったが、比較的多くの新聞を読んでいる立場からは、辛口のジャーナリズム批判に、特に考えさせられるところがあった。

教授はまず「日米関係をよくすることは、お互いに相手の悪口を言うことではなくて、それぞれ自分の国をよくすることだ。日米問題というのは実は日米問題、米米問題でないか」と述べた。そのうえで米の「ジャパン・パッシング」とともに、日本側に、最近「アメリカ・パッシング」が目立ち、しかもマスコミがそれを助長しているとして、ある総合雑誌の「悪いのはアメリカだ」の特集や、アメリカ攻撃、反ユダヤの出版物をあげて批判した。

指摘通りの事実もあるが、考えてみると声高な「ジャパン・パッシング」に対

して、一部に反発の声があがるのは自然のこと、日本だけの特性ではない。問題は、それが言論界の大勢として定着するかどうかにある。結論から言えば、日本の新聞を中心にした言論ジャーナリズムの論調は、教授が心配されるような「アメリカ・パッシング」からは遠い。

八月十五日の新聞社説は一斉に「終戦記念日」を取り上げ、その多くが日米摩擦の問題を論じたが、例えば毎日「日本は悪くない、悪いのは米国の方だ」とする一部の反発を戒め、日経も「対外被害感と反発に根ざす一種のナショナルリズムや孤独感、情緒的反感」に警告した。

研究会を司会した広瀬一郎氏の執筆だと思いが、中日・東京は同十六日「今、経済的強者である日本は、いながらにして加害者の立場にあります。それを忘れ、それどころか自分は被害者だと錯覚して行動すれば、戦争は必定です」としている。いずれも謙虚な論旨である。

具体的問題でも、三月に米国が半導体協定違反を理由にして制裁措置を決めた際、朝日の村上吉男アメリカ総局長は米側の問題点を指摘するのは容易であるとしながら、「文句を言われる筋合いはない」として、対米輸出を今のような猛烈なペースで続けるわけにはいかない」と、日本側に抑制と協調を求めた。「ココム違反事件」でも日米の安全保障観のズレを指摘、日本側の節度を説いている。他紙にも共通する論調である。

教授はまた日本側の「もつとアメリカ流に話せ、言いたいことはみんな言うんだ」という最近の姿勢が、決して「アメリカ流」ではなく、むしろ米側の反発をかつてのことと同様に指摘した。しかし感情的発言を別にすればジャーナリズムにとって、「言うべきことは言う」という姿勢は欠かせない。日本の新聞が包括貿易法案を批判したり、教授が指摘するように「安全保障と経済摩擦をリンクしないよう」米側にも申すことは、当然の責務である。

教授が提起したもう一つの問題は、米国の政治について「正確な情報」を提供していないということである。例として、包括貿易法案での下院の「ゲッペー卜修正案」や、上院の「敵対条項」をあげ、そんな保護主義的色彩の強い条項が、最終的には通るはずがないのに、日

本の新聞はいかにも法律になるかのようになり、センセーショナルな扱いをしたと指摘した。「生の情報、分析のない情報の方が、完全に情報がないことより悪い場合がある」と、手厳しく批判している。

日本の新聞側から言えば、例にあげられた記事には「ゲッペー卜修正案」などの成立する可能性が少ないことは、ちゃんと書き込まれている。米議会の対日感情をそのまま伝えたんだ、という反論もできよう。しかし紙面全体の印象からすると、多くの新聞が実体以上に過剰報道をしたという教授の指摘を、完全に否定するわけにはゆくまい。新聞に限らずマスコミが、常に批判にさらされている体質である。

教授は「正確な情報」が伝えられない原因として、アメリカの現代政治についての日本側の研究不足を指摘した。日本の政治にも学識の深い教授の発言だけに、恐れ入るしかないが、その欠陥を克服しようとするジャーナリストは多い。現に、手元にある書物でも、船橋洋一著「日米経済摩擦」(朝日新聞前ワシントン特派員・岩波新書)などは、教授の批判にこたえ得るリポートではないかと思う。

(個人会員)

ごとう ふみやす 日本新聞協会審査委員 一九五三年朝日新聞入社 記事審査部長 編集委員 企画報道室長などを務める 八五年から現職

米艦タンカー護衛

カイロ

ペルシャ湾の激動に振り回された中東特派員にとって、今年はいつになく長く暑い夏である。イラク機の米艦スターク攻撃、アメリカのクウェート・タンカー護衛作戦の開始、相次ぐ触雷事件、メッカでの巡礼者とサウジアラビア警官隊の衝突——とビッグニュースのラッシュ。しかもすべてのニュースの背景をなすイラン・イラク戦争は、国連安保理の停戦決議にもかかわらず、依然、混沌状態にあり、ペルシャ湾情勢が早急に鎮静化する気配は全くない。それだけに、中東特派員も長期消耗戦を強いられ

ている。AP、ロイターなどバーレーンを拠点とする外国通信社の場合とは違って、読売新聞は、一年半前に二人支局態勢を導入したカイロ支局が取材前線本部となった。まず、若さを武器とする佐藤伸が、米艦護衛作戦の開始日に合わせて早くからビザ工作を行い、クウェート入りした。湾口に近いドバイではローマ支局の藤原和彦、テヘランでは常駐の鈴木雅明の二人が

夏休み返上の消耗戦

高木 規矩郎

両岸からペルシャ湾情勢をカバーし、中東での取材経験の長い高木規矩郎がカイロに残って総指揮をとるといふ万全の布陣だ。

四、五〇度近く、湿度も常時六、七〇%という蒸し風呂地獄のクウェートとバーレーンで、七月半ばから五週間にわたって取材に当たった佐藤にとっては、忍耐力と体力の勝負だった。イランへの武器秘密供与工作で、中東での威信

低下に悩むアメリカが主役の事件展開だけに、現地にいるとはいってもなかなかナマの動きがつかめない。米大使館プレスアタッチメントにアプローチしようとして、門前払いを食らう。プレスの自由を掲げるアメリカも、いつになくガードが固いのである。一方、湾岸諸国の政府関係者も、護衛作戦のヤマ場だというのに、取材陣の焦りをよそにヨーロッパでバカンス休

暇。地元当局からの取材の途も閉ざされた。

米大使館チームとバレーボール大会を行って、情報を探ろうとする大世帯の米プレスチームの中に、こちらも潜り込んで潜行取材をしたり、海運業界、金融業界などに独自のニュース・ソースを作るなど、あの手この手の対応を迫られた。クウェートからバーレーンに転戦したあと、佐藤は船舶無線を使って、日本船との直接交信にもトライした。アメリカやフランスの場合、船舶会社側の協力でうまく機能した取材ルートなのだが、こ

こでは日本側の閉鎖的な企業体質の壁にぶつかり、拒絶された。この点、カイロはさまざまナイスからのペルシャ湾情報が満ちあふれている。これをうまく整理しつつ、現地に情報を逆に流す。佐藤はカイロ情報を追認するような形で状況の全体像を把握した。錯綜する中東情勢、その動きのピッチの速さなどを考えると、これからの中東取材は機動力と同時に

組織力をフルに利用しなければ情勢の流れについていけないということを感じた。

特に今回のペルシャ湾取材では、じつと我慢して現地にとどまることに意味があったようだ。夏休み返上でクウェートやテヘランの同僚が頑張ってくれたおかげで、ともすると西側情報に動かされがちな海外取材にあつて、革命イランの大国干渉をあくまでおねつけようというしたたかな民族意識、イランの影におびえながらもアメリカの軍事介入には深くコミットすることを巧みに避けようとする、湾岸アラブ諸国の外交感覚や本音を知ることができた。

そして、特派員自身としては、ヘリコプターやチャーター船などで、どこまで「機雷の海」に危険な取材を挑むべきか、それとも挑まぬべきか、をたびたび考えさせられた。今回のペルシャ湾情勢は、ベトナム戦争以来の戦争取材の基本的在り方について、新たな問いを提起したとも言える。

たかぎ きくろ 一九六五年読売新聞入社、ペイルート、ローマ特派員などを経て、八五年からカイロ支局長

メッカ事件後

テヘラン

「フィルムを出せ」——イスラム革命委員会(コミテ)の屈強な男がいきなり腰のガンベルトから短銃を抜いた。声がうわずり、明らかに興奮しているのがわかる。八月一日午前、テヘランのサウジアラビア大使館占拠事件の現場、警察のマイクロバスの屋根に飛び乗り、苦勞して撮影したフィルムが無惨にもカメラから引き抜かれる。メモ帳も破られた。

常駐記者をスパイ呼ばわり

にわたって身柄拘束されている。いづれも連行の理由ははっきりしない。とにかく、外国人記者の取材は排除する、というのが当局側の姿勢だったようだ。翌二日、テヘランで行われた「百万人抗議デモ」で、ラフサンジャニ国会議長は「より重大なメッカ事件より、大使館占拠事件を誇大に伝えた」と、西側報道を激しく批判している。

名 雪 雅 夫

なかつた」というのが批判のきっかけらしい。しかし、これは明らかに事実と違う。テヘランに常駐する外国人特派員は新華社(中国)、タンユグ(ユーゴ)両通信社ら数人を除けば、朝日、読売、東京、共同、日経、NHK、サンケイの日本人七人。弾丸摘出はその日本の全社が報じ、検視にも全社が立ち会っている。事実を曲げたのはどちらか。各種の厳しい取材制限があっても「勝手をさせるな」とはどういうことか。腹立たしさを抑えきれなかつた。

テヘランを離れる時は十日前までに文化・イスラム指導省の許可がある。官公庁、団体への取材も同省を通じて文書で申し込むが、回答まで数か月かかって結局、断られるケースも多い。市内での写真撮影はコミテとのトラブルのもとだ。戦時下のイランで取材に制約があることは理解してきたつもりだが、スパイと言われて黙っているわけにはいかない。翌日、日本の各社が署名した抗議文を

隊で埋められた。顔見知りのイラン人カメラマンらと取材していた時、治安出動したコミテの一人が私を見とがめたのだ。その頃、日本経済新聞の鈴木真特派員は、やはりコミテによって大使館に連行され、スキを見て高さ約二メートルの塀を乗り越えて脱出、ひざと手を負傷した。共同通信の戸田誠一特派員も近くの警察署に連れていかれ、約二時間半

八日、今度は政府系日刊紙「イスラム共和国」が、我々外国人特派員を攻撃した。「外国人記者に勝手をさせるな」という刺激的な見出しの論評を掲げ、「外国人記者は事実を報道せず、ただスパイ活動のために、ここにいる」とやっただのだ。「外国人特派員は、メッカで死亡した巡礼者の遺体から弾丸が摘出されたのを故意に報じようとし

指導省を通じて同紙に送った。常駐特派員の神経を逆なでする事件は最近も起きている。戦場取材で一時入国した欧米人記者ら約三十人に、オマーン湾での機雷除去活動の取材を認めたのだ。ペルシャ湾海域での取材は常駐組が何度も要求、拒否され続けていた。欧米向けのアピールか。短期滞在記者の監視つきの取材は歓迎ということか。イランで生活し、その実情を公正に伝えたい、と真剣に努力している同僚記者の姿をよく知り、私もそうしているつもりだけに、このところテヘランでの取材には何かと立ちがつかまとう。



イラン国旗で包まれた犠牲者の写真 WWP

なつき まさお 一九七三年サンケイ新聞入社
千葉支局 社会部を経て八六年外信部 八七年二月からテヘラン支局勤務

A T車暴走

ワーキングプレス

最近、クルマ好きの若者の間でこんな会話がかわされているという。

「クルマ、なに買ったの？」

「もちろんA T車さ。だって事故った時に暴走したって言えば、すぐに新車と取り替えてくれるからね」

こんなブラックジョークが生まれるほど、一時の暴走車キャンペーンは激しかった。「事故多発のオートマチック」「ラクラク操作に落とし穴」「オートドライブ誤作動で暴走」——新聞の見出しには激しさがおどっていた。

こうした一連の報道に対し、自動車メーカーの対応は後手に回った感じがする。今回の事件はまず新聞が火をつけ、国会で問題になり、業界団体の日本自動車工業会が重い腰をあげ、ようやく対策をとる——という形で終結に向かっているわけだが、その間のゴタゴタぶりに、取材する側には、「早く対策を発表すればいいのに……」という思いが強かった。

これは自動車メーカーが肝心の

急発進事故の原因を「大半が運転者の誤操作」という見方をとっていたからだ。

自工会は経団連記者クラブを対象に毎月一回、定例会見を開いている。報道が高まりだした中、六月十八日の定例会見でA T車暴走に関する質問が出た。豊田章一郎会長（トヨタ自動車社長）は「暴走をどう思うか」という質問に対し、「誤操作がないよう自動車教

メカオンチ記者の心配

渡辺秀夫

習所での講習に力を入れてほしい」と述べるのにとどまっている。つまり、意識的に構造上の問題を避けたわけだ。そこには口には出さないものの「誤操作説」のニュアンスを強く打ち出していた。

メーカー間の足並みも乱れた。日産のとった対応策が業界他社に突出した印象を与えたからだ。

同社はフェアレディZを自主回収して、シフトロック装置を付け

ることをいち早く表明した。自工会ベースで急発進対策のワーキンググループの設置が決まり、ようやく重い腰をあげかけた矢先に独自の装置を付けると発表したものだから、各社がカチンときた。「日産はひとりいい子になっていく」——。

こんなゴタゴタぶりをまじかにみていると、なんとまあ「村意識」の強い業界なんだろうと思う。

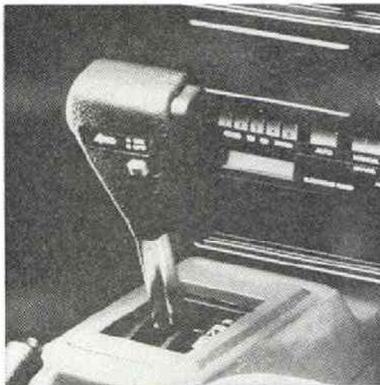
先走ってシフトロック装着をやってみたり、あるいは自工会にすべておまかせ、とのんびりしたりしている間に、早く業界としての態度表明をすれば、もっと早くユーザーに安心感を与えることができたろうに、と思う。

安心感といえば、一連の報道がユーザーの不安をかきたてることになかったか。激しい暴走事例を報告するだけでなく、A T車の操作方法、発車時はブレーキを踏みながらシフトレバーをチェンジするという鉄則を併記していたら、多くのA T車ユーザーにいたらずら

に不安を与えずにすんだはずだ。

今回の急発進の原因ははっきりしないながらも、誤操作説と欠陥説に分かれている。欠陥説の中には半導体への信頼性の問題がある。私個人としてはこの半導体というのがこわい気がする。

決してメカに強い方ではないが、最近のクルマはボンネットをあけてみても、さっぱり見当がつかない。手も出せない。電子化が進んでいるからだ。今後、クルマの電子化は一段と激しくなる。だから、いまこそA T車欠陥説をつぶしておいてほしいという願いは、メカオンチの私ばかりではないだろう。



電子機構の故障なのか
誤操作なのか
写真 日刊工業新聞

わたなべ ひでお 一九六八年日刊工業新聞入社
都内支局を経て繊維、化学、電気業界を担当した
後、八五年から自動車業界担当

岡本綾子番

ワーキングプレス

米女子プロゴルフツアー挑戦七年目で11勝、猛女・岡本綾子に日本からマスコミ嫌いの風聞がとどいた。

「いったい誰が言うのかしら。わたし、一度もイヤがったことない。ただ騒がれるのは好きじゃないけど……」

なるほど綾子に対し、取材の注文はヤマほど殺到してくる。テレビ、運動記者、雑誌、遠征先々の地元紙からインタビューの申し込み。あのベッツィ・キングが「(綾子は)米国の大統領並みの忙しさ。それだけ責任も重い」と言っただけだ。全て応じているときばき切れないのだ。

「いっぺんにやってくれればいつでも。何度も何度も同じ質問についてしゃべるんじゃない。このあたりを理解してよ」

巨人V9時代の川上哲治監督も同じようだった、と聞いている。現在、ヤクルトのホーナー、中日の落合らも、同じ心境なのだろう。本心はマスコミ嫌いではなかった。

その証拠に、綾子番記者をやって三年。米全国各地を追い回しているが、プライベートタイム以外「ノー」と断られたケースは皆無に近い。

フロリダのある大会の前夜祭だった。いい気分、ほろ酔い綾子がホテルのプールサイドに出てきた。並んで歩

き、話し合っているうちに、記者はドボンとプールへ突き落とされてしまった。

「あら、悪かったわ」と翌朝のコメントだが、全く悪気もなければ、意地悪でもない。みんなが見ている前で、ほんのアメリカ式に、綾子流のチャーム気が出、一番若い小生が犠牲になったわけ。

メジャー大会、デュ・モリエ前日のプロアマのときもひどい目にあった。

綾子に向けてカメラを構えていたら、アマチュアの打ったボールがレンズめがけて一直線。命がけで逃げたものの、あつという間に背中へ命中し、一瞬気を失って病院へ運ばれた。

心配そうな綾子が「佐渡ちゃん死なないですよ」と、近づいてきたのだけ覚えていて。一日寝て休養したあと、翌日取材に行ったら「死なずにすんでよかったね」だって。本音では心配してくれて、ことばにあらわさないのがいかに彼女らしい。

九か月間のアメリカ行脚

佐渡光貴

リゾート地の試合では、コンドミニアムへ泊まって自炊することもある。ハワイのカリイ島の時など、女子プロ仲間「料理をこちそうするんだと言って、近くのスーパーへ買い物に。といっても、車(レンタカー)を持ってきている報道陣に、「これとこれを買ってきて」と依頼してしまふ。こんなときの姿はごく普通の女の子に一大変身――。

毎年一月に渡米し、九月末の帰国まで、女子プロツアーとともにアメリカ全土のかけめぐり。決まってカメラ、ペン、衣類の全財産をかついでの旅だ。

もう、Tシャツ、半ズボンに黒のアタッシュケースという奇妙な出動姿に向ける。アメリカ人の鋭い視線にも慣れた。年間の予算は八百万からときに一千万円近くかかる。

ホテルだって一泊百ドルぐらひはずまいと危い。ふところ具合で七十〜八十ドルぐらひの安宿に泊まり、ひったくりや、からまれてなぐられそうになったことも。つまりピンからキリまでのホテルが我が家。慣れたからいいようなもの、渡米当初はほんと

うに心細かった。

取材方法もかなり違う。こちらのゴルフ記者は、家族同伴で旅してくるし、うらやましい限り。なんとリゾート地での大会には一族郎党大勢やってくる、プレスルームが超満員になってしまう。

プレーの見方も「あのバットは入るかどうか」などギャンブルを楽しむ一石二鳥?のやり方。日本の、とくにスポーツ紙の取材はラウンドのメモをとり、戦況を調べ、談話をとるなど、働きバチそのもの。

このため「おまえはクレージーだ」とよく言われる。それもこれも根本的に環境、考え方が違うからしかたない、と解釈している。最近はずくづくそう思っている。

まごみったか 一九八一年東京中日本スポーツ新聞社 八四年から岡本綾子担当



ネスル世界選手権(8.30)の優勝で、全米女子プロツアー・今季4勝目をあげた
写真 東京中日本スポーツ

ク ラ ブ ゲ ス ト



G・カーチス コロンビア大学教授

「ゲッパート法案は、米国内にあってはひどいものになるが、それでも賛成する」という議員に、「なぜ？」

とたずねたら、「どうしても日本にシグナルを送りたいから」と答えたという。日本にシグナルを送り注意喚起を促すが、米議会の流行になっており、それに対して、日本は第一次から第八次までの市場開放パッケージというシグナルで応える。「シグナルとジェスチャーの交換ばかりでフラストレーションがたまる一方」。そういう中で、米議会はいよいよ制裁措置採用段階へ。穏健な知日派の目からみても先行き楽観を許さない。「最近はお互いに被害者意識が強くなって、自分の問題を自分のものとしてでなく、相手の問題にしがちである」とし、米国内にも被害者意識が生まれつつあると述べる。

安全保障と経済をリンクさせないようにはすべきなのに、事態は悪い方向に行きつつあると懸念する。「軍事大国にならないと言っている

る大幅黒字国が、なぜF.S.Xの国産化を言うのか、米国人には分からない。結局、共同生産というところに落ち着くのだらうが、それで満足する米国人は一人もいない。やっぱり外圧しかないということになり、次はもっとそれが強くなる」と。

日本人よりも早口の日本語で話した。包括貿易法案等をめぐると国の新聞報道についても、「開戦前夜の印象を与えかねない」と、率直に感想を語った(関連記事5ページ)。

終了後の応接室では、こぶ茶をのみながら、ベテラン会員たちとポスト中曽根をめぐって、にぎやかな意見交換も。

田中 昭二 東京大学教授



「突如として、昨年暮れから今年の初めにかけて、高温超伝導が急実現し、目まいのようなものを感じている」

昨年四月、IBM チューリヒ研究所のミューラー、ペドノルツ博士が、酸化物超伝導体の存在を示唆する論文を、西ドイツの物理学雑誌に投稿した。これが実際に出版されたのが九月、田中教授の研究室の人たちの目に

とまったのが十月初めであった。酸化物の超伝導を十年近く研究していた教授は、その論文を確認するための実験を開始した。そして、十二月八日朝、絶対温度三〇度での超伝導を確認、九日、データと論文をファクスでスタンフォード大へ送った。これを機に十二月十日以降、高温超伝導体フィーバーが始まる。ミューラー博士は「だれも信用してくれなかったが、あなたの研究のおかげで、社も認めてくれた」と教授に語ったという。

ある物質を超低温に冷やすと電気抵抗がゼロになる超伝導現象は、一九一一年にオランダのオネス博士が、水銀を液体ヘリウムで冷却し絶対温度四度で発見した。その後、七二年に絶対温度二二・三度で確認されたが、臨界温度(電気抵抗がゼロになる温度)の上昇はそこでストップ。十数年間、超伝導研究は完全に壁にぶつかっていた。それが教授の研究室で、昨年十二月に三〇度、四〇度になり、今年の二月米ヒューストン大のチユー博士が九八度を達成した。

「二〇〇年に一つくらいの発見なので科学者としてフィーバーしない方がおかしい」と言う教授から、一時間半にわたり、①超伝導現象②その研究の困難性と歴史③昨年暮れからの新展開④液体チックス超伝導の実現と応用範囲⑤各国の研究態勢と実情などについて説明をきいた。

記念署名は「超伝導の夢。電気のは深みがなくて安っぽいので」と。【八月一日(火) 研究会「超伝導のフロンティア」 司会 梶原委員 出席 一〇一人】



梶原 治 軍事評論家

朝日、東京の当日朝刊一面を示す。「本土防衛・北方重視へ——シリーレン防衛から転換図る」 「洋上防衛を基軸に——防衛力本土

土を含め見直し」。いずれも防衛構想の重点を、防衛庁が転換する意向であることを報じたもの。「一方はシリーレンが定着したごとく、他方の洋上防衛も意味不明。分からないことを前提に記事にしている」と痛烈である。

「対地支援だったのが、F.S.Xで対艦攻撃に変わっているのは、シリーレンの安全確保とか洋上防衛とかの任務に関わっているのではないか。一千海里まで警戒することだったのが、いつの間にか作戦区域になっている」。一問題ではあれだけ騒ぐプレスが、どうしてこうした点を掘り下げないのか、と。

F.S.Xの要求性能を公開せよ、との立場で、問題点を指摘した。【八月二十五日(水) 研究会 司会 石丸和人員員 出席 九一人】

スタジオ訪問

テレビ東京

「キャスター」

持論ぶつけ合う 経済番組

「今までにないエキサイティングな経済番組をつくらう」。昨年十月から始まったテレビ東京の『キャスター』は、レギュラーキャスターとゲストとの白熱した議論を軸にした、生放送の経済番組である。

「解説だけの番組も、ハウツーものも、タレントを使うのもやめよう」「ためになるとか、分かりやすく面白くなくていうのもよそう」「経済学の理論や、数値的なものばかりを追うのも避けよう」。番組を企画する際、スタッフからこんな言葉が次々出されたという。

佐野直躬報道部長も、「経済を正攻法でとらえる番組をつくりたかった」と語る。生放送にしたのも、「絵」になりにくく、平板的になりやすい経済番組にメリハリをきかせ、テンポのあるものにするためだ。「それにこの時間は、アメ

リカの一日が動き始めているわけで、VTRではネタが古くなってしまふ危険もあります」。

三十分の放送時間を四月に、日曜夕方から月曜夜十時半へ移行した。毎週木曜日、キャスターとスタッフが集まり、次週のテーマについて相談し、論点や争点を整理する。が、本番で論議が白熱し、キャスターとゲストが持論を激しくぶつけ合うことが多いので、結末は終わってみなければ分からない。それがまた、視聴者をひきつけている。

「意見の言いっぱなしだという反ばくと、主張があつて面白いという声と、両方あります。ただ、ひとつの問題にもいろんな見方、異なった見解があるということを、視聴者に紹介したい。出演者のナマの考えを、ポイントと視聴者に投げかけてみたいのです」

だから毎回、視聴者からの反響も大きいし、きびしい反論も返ってくる。六月に「コメ問題」を放送した時は、農協からの反論が強かった。「じゃ、反論の場を提供しますからゲスト出演してください、と言うと出てこない。それだけの論客がないということなのですかね」。キャスターとの議論が番組の柱であるだけに、ゲストの人選は重要なポイントになる。「ゲストをいじめるのが目的じゃな

いんですから、うだましうちうだまいたいことにならないよう、十分配慮しているつもりです」と佐野さんは言う。

メインキャスターは、加藤寛氏（慶大教授）。そしてサブキャスター兼進行役は、堀紘一氏（ポストン・コンサルティング・グループ副社長）である。

加藤さんは新聞でもテレビでも幅広く活躍しているが、この『キャスター』は特にお気に入りなのだそうだ。「経済の視点ではつきりとものが言えること。そして、見ている側も経済の分かる人が多いこと。番組に対しての射た質問、鋭い反響が返ってくるので、とても張り合っている」と言う。

一方の堀さんは読売新聞、三菱商事を経て、現在は経営コンサルタントというキャリア。テレビの仕事は今回が初めてである。「テレビは良くも悪くも一回限り、後が残らないという感じがしますね」。コンサルティングの仕事も基本は情報で、論理性と信頼性が重要になるが、「ともかくテレビはフレッシュ」と。複雑なロジックを、ひとつずつついでいねいに説明していくのが経済番組なのだろうが、それをいかに歯切れよくし、僕としてはどの辺でどう吠えるかを常に考えているんですが……」。

この二人に、ベテランアナウンサーの宮崎絢子さんが加わっている。一家言を

持つ両キャスターとゲストたちの間にあって、いわば「非武装地帯的」な役割りを果たしている。ちよつと待ってくと過熱した論争を冷やしたり、一時停止させたり、「これ、タイミングがとてむずかしいんですよ……」。

佐野さんは、「とにかく時間が短い。時間の制約で論議が飛躍し、短絡的にならないように注意はしているが、せめてあと十五分はほしい」と語る。

取材した八月二十四日。この日のテーマは日米経済摩擦。ゲストは霍見芳浩ニューヨーク市立大教授である。本番直前の控室では、なごやかながらも熱っぽい議論がすでに始まっていた。

「日米関係はますます悪化しています。中曽根外交の大失敗です……」。霍見教授のやや挑発的な発言で番組は始まった。（長谷川和子）



「経済と政治をからませて」加藤、堀内キャスターと宮崎アナウンサー（右から）

プロフィール

◇個人D会員

八月一日付入会の個人D会員、法人・個人賛助会員、特別賛助会員の方々です。

会合紹介

1日▽ジーン・ダンサー 米デューク大
学コミュニケーション研究所副所長歓迎
会(協会 小松原久夫会員) 3日▽座
談会―宮繁護日本道路公団総裁、山根孟
本州四国連絡橋公団総裁、藤原武日本道
路建設業協会副会長、鈴木道雄建設省道
路局長(日本工業 星野伊佑会員)▽新
聞開発研究会(福井 菊池智会員) 4
日▽政経文化クラブ 安部譲二氏「堀の
中の日本」(奈良 中川雅裕会員)▽記
者懇談会―農政クラブ記者と堀内已次全
中会長(全中 石倉皓哉会員) 5日▽
FNS理事社編成部長会歓迎会(東海
テレビ 土井哲夫会員)▽金森久雄さん
の「エッセイストクラブ賞」受賞をお祝
いする会(日経 茂田章会員)▽対談
「競う」―ヨットマン大儀見薫氏と登山
家高橋和之氏(日経 新井淳一会員)▽
第二回東京国際映画祭記者会見―岡田茂
東映社長、松岡功東宝社長ほか(コンペ
ンション 芹田貢会員) 7日▽木原建
治郎さん送別会(九州朝日 山崎祐信会
員) 12日▽新聞協会賞選考分科会(協会
田村進会員)▽『新聞経営』インタビュ
ー―吉川元忠日本興業銀行調査本部長
(協会 林利隆会員) 13日▽ANN報
道部長会(テレビ朝日 川内一誠会員)

19日▽東京写真記者協会幹事社部長会
(共同 柳沢良純会員) 20日▽横浜音
楽祭審査委員会(ラジオ日本 当麻桃之
会員) 21日▽D教室の集い―上智大新聞
学科OB会(春原昭彦会員)▽会社説明会
(西日本 吉原好明会員) 24日▽JNN
編成部長会懇親会(TBS 磯崎洋三会
員)▽民放解説者研究会 ゲスト 加藤
紘一前防衛庁長官(朝日放 岡村黎明会
員)▽北日本政経懇話会(北日本 中村
外茂夫会員) 25日▽電波7社会(読売
土井共成会員)▽情報社会学研究所(山
形新 堀田稔会員)▽中部9社会(静岡
新川西脩司会員) 26日▽民教協幹事社会
(テレビ朝日 今井慶一会員)▽アナウ
ンサー入社試験(東海テレビ 土井哲夫
会員) 27日▽JNN報道研修会(TB
S 志南溥会員) 28日▽都市情報研究
会(毎日 太田稀喜会員) 29日▽'87「交
通安全」キャンペーン・ラジオオンポジ
ウム、メッセージソンググランプリ発表
会・表彰式(民放連 泉長人会員)▽日
本新聞学会理事会(協会 桂敬一会員)
31日▽サンケイ商業賞審査専門委員会
(サンケイ 鈴木健之会員)▽科学技術
政策分科会(読売 石井恂会員)

(会員がクラブ施設を利用して行った主な会合)
です。八月の総回数は七四回でした。

九月から、シリーズ研究会「土地を考える」を始めることになりました。が、私たちシリーズ企画小委員(広瀬、鈴木、平田)の実感としては、「(土地を)走りながら考える」というのが偽りのないところでは。

ある調査によると、日本の土地評価は千七兆七千億円(六十年末現在)で、国富に占める割合は約二五%。土地所有者は全国で延べ三千百万人にのぼり、国民の四人に一人が土地所有者という勘定になるそうです。その土地が今回のようにムチャクチャに値上がりしてくると、一人の持てる者と、三人の持たざる者とは、当然、土地に対する関心の持ち方に利害関係の差が出てくることは避けられません。クラブで顔見知りの会員たちに、今度の研究会に対する希望を聞いてみたとき、アメニティ(快適な生活)の実現を土地というカベにはばまれていてというAさんは「土地を持っているヤツがうらやましい」と言い、地主の親を持つBさんは「相続税が心配だ」と、持てる者の悩みを告白していました。

シリーズ研究会
土地を考える

平田真巳
(企画委員)

また、今回の高騰は、東京を中心とするもので、地方圏の大部分の地域の地価は安定している、という著しい二極化が特徴だ、とされています。となると、東京に定任している会員と、地方に本拠を持った会員とは、関心の持ち方が違ってくるかもしれません。さらに、今回の高騰の原因については、東京一極集中の帰結としてのオフィス需給のアンバランス、という実需が主因だとする見解と、カネ余りの中の投機こそ主犯である、とする見方に分かれています。

「知的関心」をお持ちの方、海外からみた日本の土地といった問題に対するも少なくないでしょう。

あれやこれやで、問題はどんどん拡散していきそうです。そこで今回はまず国土庁の清水達雄官房長にご登場願って、問題点を整理していただき、そのあと、学者・研究者、都庁、不動産、建設、金融関係者などから、月に二回のペースで話を聞いていき、年内に一応の区切りをつけたいと思います。来年はPART IIが必要になるでしょう。



▼シンガポールを基地にして、まるまる九か月の単身生活を終えて、先ごろ帰国しました。特派員の時から通算二十余年の長いおつき合いのシンガポールですが、実に日進月歩の発展変貌ぶりです。それをこの日、この耳で見聞きするため、現地の小新聞編集長を務めながら、自分自身の勉強と取材活動も続けました。

単身生活は正直に言ってあまり楽なものではありません。が、職場や日常生活の中のローカルの人々との体験は、特派員当時には経験出来なかった貴重なものばかり、有意義な生活でした。

マレーシアの取材先等では、日本記者クラブ会員証がシンガポール政府発行の記者証よりも効果的であったケースもありました。

(共同通信出身 土肥 良造)

▼ヒョジョンなことから、この四月から新設の「いわき明星大学」の先生をすることになった。教養語学(英仏対比)担当ということだが、主に現代実用フランス語。一応言語学的にみて、ラテン語からどう変化していったかをまず講義したが、「それは弱い」「それはいえてる」「って、フランス語でどういうんですか」と、美人女子学生の質問あり。そういわれて気の付いたことだが、「新人類」の日本語は、どういうわけか、英語より、フランス語そのもの、ずばりのものが多い。

それはいえてる。(ca se peut dire) それに弱い。(Je suis faible en...)。英語には、ずばりこの表現のないのが不思議だ。新日本語のルーツも研究課題になった。

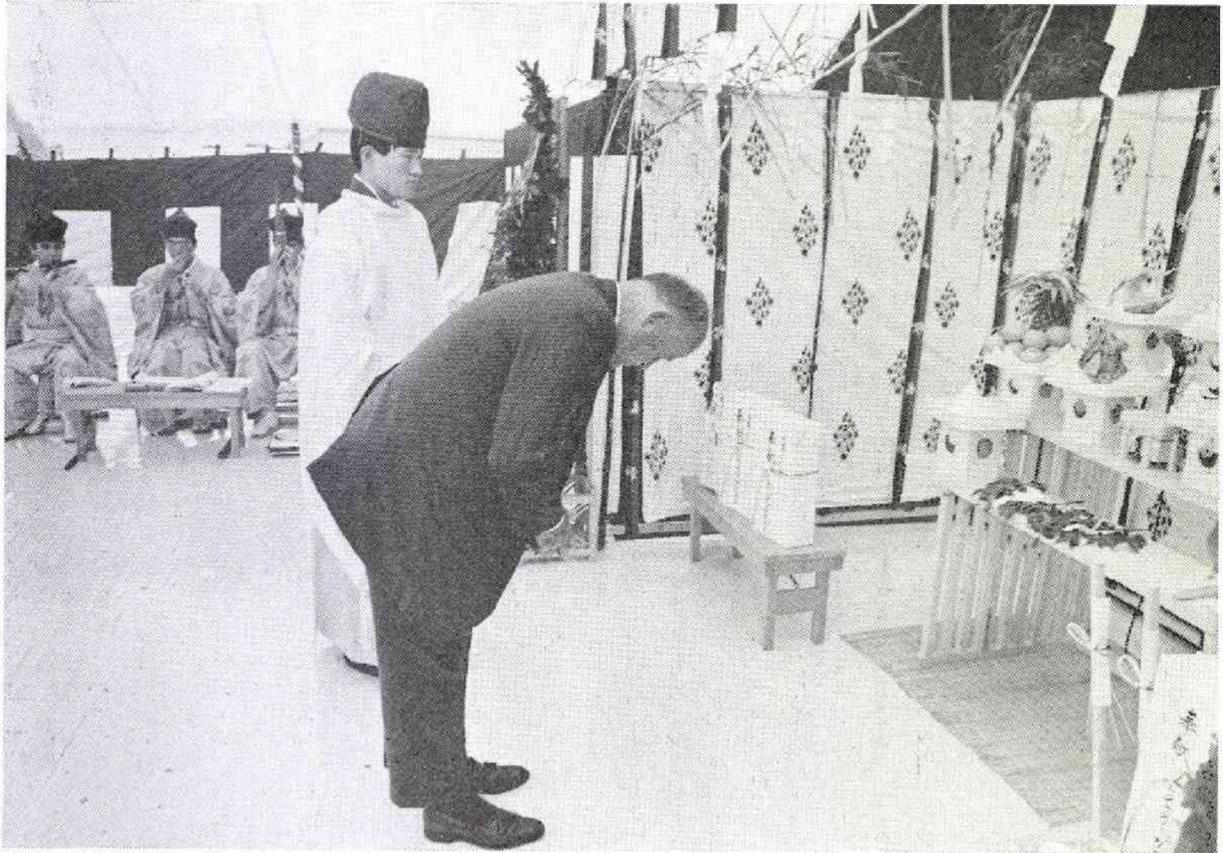
(共同通信出身 黒木 寿時)

寄 贈 書

- | | | | |
|------------|--------|------------------------------|---------|
| 現場の地方新聞論 | 森 可昭 | 「情報社会における青少年の価値観についての総合調査」報告 | 山形新聞社 |
| 李香蘭 私の半生 | 藤原作弥 | ITALY | イタリア大使館 |
| 死を看取るころ | 〃 | ITALY today | 〃 |
| 追想録 平岡敏男 | 毎日新聞社 | ITALIA OGGI | 〃 |
| 日本新聞年鑑'87 | 日本新聞協会 | 読む事典・女の世界史 | エッソ石油 |
| 日本新聞協会蔵書目録 | 〃 | | |

写真廊

写真 栗田 格 (ガンマ通信社 東京支局長)



郷に入りては郷に従う

歴史は悲劇をまじえながら激しく展開して行く。日本人も米国人もお互いに賢明でなかったがために戦争をした前科者だが、いまは相身たがいの間柄、最近では日本企業が米国に移住、米国企業が日本に移住してくる双方のグローバリゼーションの時代になってきた。

とにかく人間の知恵が企業の盛衰に重大な意味合いを持つ時代。その人間の知恵を、昔の人が勝手に線引きして決めた国境内に求めていたのでは、この乱世の地球戦国時代は生き残れないということで、「デイスカパー人間」を求めて、最近では盛んに米国企業の日本進出が増えている。

写真は米国大手特殊化学メーカー、W・R・グレースが厚木市に基礎研究を中心とする研究所「ジャパン・リサーチ・センター」を設立することになり、グレース会長がじぎぎ乗り込んで七月末、一〇〇%日本式の地鎮祭をやっているところだ。

企業のグローバリゼーションは双方が共通のルールと相手国の法律、慣習に準拠し行動することだとされているが、それにしても、真夏の暑いテント張りの中で真剣に大地主神を礼拝する姿には胸を打たれる。

地鎮祭 ご利やくのほど 知らねども

郷に入りては郷に従う (読人不知)

(桑田 琢磨)

新しいクラブタイが好評です

「オシャレてるね」「ものがいいね」——銀座の和光で製作した新しいクラブタイが評判です。

紺地のレジメンタル・ストライプ、紺地に角のドットをちらしたものの、それとえんじを主調にした細かいストライプの三種類です。目下のところ、レジメンタル・ストライプに人気があるようです。秋はおしゃれの季節です。ニュータイをどうぞ。九階の受付で一本七千円でお分けしています。

コーヒー、紅茶には

喫茶券をご利用ください

ラウンジでコーヒー、紅茶などのソフトドリンクをお飲みになる際には、できるだけ「喫茶券」をご利用願います。一冊20枚つづりで、二、四〇〇円です。レジで販売いたしております。

会員の著書

南永洋捕鯨史	板橋守邦
(中公新書 五六〇円)	
歌集 敦煌微笑	深山 栄
(角川書店 二、五〇〇円)	
原子力 その不安と希望	岩本 康
(講談社 一、六〇〇円)	
英語 NOW ナウ なう	滝川 勇
(時事通信社 一、一〇〇円)	

ご惠贈いただきました ラウンジの書棚にあります

ゲスト・カールト

▼第7回中近東地域記者研修計画参加者(8月16日)

9月12日 F P C) ハッサン・アブドル・ラハマン (アラビアTVニュース パーレーン) モハマド・アーセム・モハマド・エル・キルシュ (アル・アラブ紙 エジプト) アテフ・アメッド・アブド・ラブー (ク) ハーリッド・ナーゼル (アズ・シャーク紙 サウジアラビア) スルスン・エレル (テルジュマン紙 トルコ) アルマソウ・イ・ヤセアン (サブ通信 イエメン) ▼第14回日米記者交換計画参加者(9月13日)10月4日 新聞協会) パトリック・E・コー (アクトロン・ピーコン・ジャーナル紙 オハイオ州) ネビル・グリーン (セント・ピータースバーグ・タイムズ紙 フロリダ州) デビッド・ホルワート (ヘラルド・リーダー紙 ケンタッキー州) エレン・ジェームズ (ボルチモア・サン紙 メリーランド州) リチャード・C・ロングワース (シカゴ・トリビュン紙 イリノイ州) ガイ・R・マクミリン (キーン・セントネル紙 ニューハンブッシュ州) ジーン・ピンダー (ニューヨーク・タイムズ紙 ニューヨーク州) ロイス・ロー (NBCニュース・サービス ニューヨーク州) ジェームズ・ローウェン (ミルウォーキー・ジャーナル紙 ウィスコンシン州) ジョン・ウルマン (ミネアポリス・スター・アンド・トリビュン紙 ミネソタ州)

展示会の招待券 朝日新聞社から「唐招提寺展」「ナイフ3人展」「タイ美術展」「カミィユ・タローデ展」「音のアンティーク展」「ブリティッシュ・スタイル一七〇年」の招待券をご惠贈いただきました。お礼申しあげます。

計報 久芳健夫会員(信濃毎日新聞社)が七月十六日肺がんのため、松本克巳会員(中日新聞社)が八月六日肝不全のため逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

訂正 八月号会報五ページに掲載した『ココム違反ワシントン』の執筆者高成田亨氏は、高成田亨氏の誤りでした。おわびして訂正いたします。

九月一日現在の会員状況 法人会員 一四四社 基本会員 六一六人 個人会員 一、三六一人 法人・個人賛助会員 七六社 二三九人 特別賛助会員 七三人 名誉会員 一六人 計 二二〇社 二、三〇五人

九月の行事(7日現在)

- 11日(金) 午後1時~2時15分 カロロス・パブリアス ギリシャ外相記者会見
- 16日(水) 午後1時~2時 ビゲジス・フィンボガトチル アイスランド大統領記者会見
- 午後2時~3時30分 シリーズ研究会 『土地を考える』(I) 清水達雄国土庁官房長
- 25日(金) 午後4時~5時30分 マルチン・パンゲマン西ドイツ経済相記者会見

会報委員長 深川 誠

委員 小林 利隆 三好崇一 松井 章 東郷茂彦 連絡 長谷川 河野(事務局) 五〇三一二七二二